

観世十郎の元服祝能

天野文雄

文明十五年(一四六三)三月十八日条の『大乗院寺社雑事記』は春日若宮祭の後日能の記事に続けて、次のような事実を記している。

十郎観世、去月入滅之間、座破了。仍京観世、今度神事参向云々。

観世十郎は十郎元雅の嫡子、永享五年(一四三三)三月奥書の『却来華』において、元雅の夭折による一座破滅を宣言した世阿弥が、「さるほどに、嫡孫はいまだ幼少也」と嘆かねばならなかった、その「嫡孫」である。成人後の彼は、いわゆる越智観世の大夫として、音阿弥嫡流の京の観世座とは別に、大和を中心に活動していたらしいが、右はその観世十郎の死を伝えたもの。この記事によれば、その死は十郎個人の死というにとどまらず、越智観世座の破滅をも招来したというのであって、永享元年以来の「観世大夫両座」(『満濟准后日記』)という状態に一応の終止符をうつ事件でもあった。この観世十郎の事蹟については、右の没年の他には、わずかに南都両神事への参勤を常としていたこと(右の記事も

それを物語る)や、地方での興行などが確かめられるくらいで、それ以上のことは不明である。いかにも父祖の不遇を一身に引き継いだ役者らしい埋れ方だが、最近その事蹟の一端を伝える資料に出合ったので、それをここに紹介し、改めて彼の事蹟を辿ってみたいと思う。その資料とは『大日本仏教全書』に収められている『東大寺雑集録』巻七の次の記事である。

一、文安四丁卯六月廿四日、八幡宮前観世十郎元服祝能あはれ罷在之。

『東大寺雑集録』は宝暦五年(一七五五)頃の成立、東大寺薬師院実祐の編、室町中期から江戸中期に到る東大寺の諸記録の集成にして、『東大寺要録』、『東大寺統要録』を襲うものとして編集された信頼度の高い資料である。

これによれば、観世十郎が東大寺手向山八幡の神前において元服祝能を舞ったことが判明する。時に文安四年(一四四七)、これまでに知られている観世十郎の事蹟で最も早いのが『大乗院寺社雑事記』記す長祿元年(一四七〇)の

薪猿案への参勤であるから、この記事はそれより十年も早い時期の活動を伝えるもので、わずかだが、『却来華』以来二十五年の空白を埋めることにもなる。だが、この記事の価値はこれが元服祝能とされている点にある。このような能役者個人の祝儀を名目とした演

能の例は室町以前では寡聞にして知らないがこの記述は、大和の人々がこのときの観世十郎をいかなる目で見えていたかを暗示するものように思う。すなわち、世阿弥の嫡孫でありながら越智に隠棲しなければならなかった、その不遇に対して世人の同情が集っていたろうことは容易に想像されるところ。その観世十郎がようやく元服することになった。京では五十歳という脂の乗りきった時期の音阿弥の芸が貴賤を魅了していた。越智には叔父の元能が後見として健在であったかも知れないが、一座再興はこの若き大夫の双肩にかかっていた。そうした状況の中に『東大寺雑集録』の記事を置いてみると、そこには観世十郎の将来に対する世人(もっと限定すれば東大寺僧)の期待、後援あるいは野次馬的な関心が反映しているとみてもさほど誤まるまい。

さて、元服というからには、おのずとこのときの観世十郎の年齢が限定されてくる。もちろん元服の年齢は時代・階層等によって必ずしも一定してはいない。公家の場合などは

十一、二歳と十五、六歳というのが平均的で、能役者の場合は『観世小次郎画像賛』の「歳甫十五、未冠」が一つの参考となると思うが、この時の観世十郎は十四歳以下ではありえない。というのも「嫡孫はいまだ幼少也」とされた永享五年はこの元服祝能の十四年前になるからであって、文安四年における観世十郎の年齢が十五歳以上であることは間違いない。上限も十七歳くらいとみておけば無難であろう。彼を取りまく状況を考えると、元服の時期はそう遅くなるとは思えない。ともあれ、文安四年の観世十郎は十五歳と十七歳であったと考えられるわけだが、これは必然的に『却来華』の「幼少」が一歳と三歳であることを導き出す。従って没年の文明十五年には五十一歳と五十三歳であったことになる。これについては『能楽源流考』が「幼少」を十歳と仮定して、享年は六十歳くらいと推定しているが、私見によれば「幼少」ははるかに幼少だったことになる。そして、嫡孫のこの年齢は元雅亡きあとの世阿弥の危機感と大いにかかわるところがあったはずである。「思はざる外、元雅早世するに由て、当流の道絶えて、一座すでに破滅しぬ」（『却来華』）、あるいは「（道の秘伝・奥義を）今は残しても誰がための益かあらむ」（『夢跡一紙』）といった深い絶望には嫡孫のあまりな幼なさという

現実が強く作用していたにちがいない。

ところで、永享五年時の観世十郎をごく幼少とするのは、実は本稿が最初ではない。それを指摘するのは香西精氏「元雅行年考」（『続世阿弥新考』所収）で、この論考は三郎を名乗る元重（音阿弥）が元雅より年長であったはずとの卓抜な着眼に出発し（それまでは元雅が年長とされていた）、元重との関係から元雅の享年は三十四歳以下だとし（旧説は四十歳直前頃）、その推定享年を元雅周辺の人物の年齢構成の中で克明に検証したものの。何一つ新資料を加えたわけではないにもかかわらず、驚くべき説得力を備えた論稿だが、その中で香西氏は観世十郎にも触れ、「元雅三十歳の時の子として、永享元年（一四三二）生れの四歳で父を喪ったものと見たい」とされているのである。これでゆくと、『却来華』の「幼少」は五歳という計算になり、元服祝能の催された文安四年は十九歳となって、いささか高齢すぎると思われるが、基本的には香西氏の推定は正しく、その慧眼には改めて脱帽のほかはない。新出の元服祝能の資料がはからずも香西説の裏づけとなった形であるが、香西氏とは逆に、この観世十郎の事蹟から元雅の享年を考えてみると、落ちつくところはやはり香西説の三十代前半というあたりになるようである。（国学院久我山高専学校講師）